

---

# 魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

剣聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

### 【Nコード】

N1651M

### 【作者名】

剣聖

### 【あらすじ】

二人の出会いは必然。

誰かが決めた訳では無い、かといって本人達が決めた訳でも無い。ただ、結ばれていたのだろう。

俗に、運命の赤い糸と呼ばれる物に。

死んだと言われている世界を救った英雄の息子と、滅びた古の王国にて黄昏の姫御子と呼ばれた少女の、物語が今、始まる。

## プロローグ・二人の出会いはこの感じ（前書き）

この作品はアスネギ要素が中心になって来ます。

だから所々ストーリーを飛ばしたり、ネギが変わったり（多少大人になってます）してます。

それでもいい方は、どうぞ。

## ブローグ・二人の出会いはこんな感じ

貴方に会ったのは、風が吹く、まだ少し寒い時。

遅刻しないよう全力で走っていた僕の耳に、貴方の声が偶然聞こえた。

その時、僕が貴方に話しかけたのも、偶然でした。

恐らく、これも運命だったと思うんです。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

プロローグ・二人の出会いはこんな感じ

麻帆良学園の登校風景は凄まじい。

電車を降りて様々な手段を使い、地鳴りを上げ学校へと向かうその光景は、まるで戦場だ。

そんな光景の中に、女子が二人。

オレンジ色の髪を、鈴のついたりボンでツインテールにしている少女は叫ぶ。

「あーもあー！遅刻じゃない！」

「アスナが二度寝するのがわるいんやえー」

「わ、分かってるわよ！」

もう1人の黒髪少女にビシッと突っ込まれ、彼女は呻いた。

彼女の名前は神楽坂明日菜。

麻帆良学園女子中等部に所属する、中学二年生。オッドアイが特徴的である。

ちなみにもう1人は近衛木乃香。アスナのルームメイト兼、親友である。

「ああ、高畑先生に早く会いたい……」

「まあ、その前に新任教師さんのお迎えをしなきゃあかんけどな」

好きな男性をイメージし、トリップしかけたアスナの精神をこのかは一言で戻す。

恨めしそうにアスナはこのかの方を見た。

「なーんで学園長の孫娘のアンタが新任教師のお迎えまでやらなきゃなんないの……ハァー……」

長々とため息を吐くアスナに流石に不憫に思ったのか、このかは手元にあるマイ手帳を見ながら、

「まあまあ、今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ」

「え！？マジ！？」

このかの言葉に全力疾走しながらアスナが聞き返す。

「あつ、でも新しい出会いってことは高畑先生じゃないの！？」

「そうなるなー」

「ギャアー！？それはヤダー！」

女子らしく無い叫び声を上げ、頭をブンブン振り回す。  
長いツインテールがブンブン振り回されたのと、叫び声で周りの視線を集めているが、本人気づかず。バカここに極まり。

「あはは。まあ、占いやし。余り気にしすぎてもしやあないんやないか？」

「占い研のアンタが言っているの？それ……」

なんというか、占いに喧嘩売ってるようなセリフを言ったこのかを呆れ目でみるアスナ。

「それにしても、アスナ足速いよねー。うちコレやのに」

このかは自分の足元を見た。

彼女は登校にローラースケートを使っている。

アスナはそのローラースケートを使っているこのかに自分の足で並走していた。

はっきりに言って普通の女子はこんなこと出来ない。

「悪かったわね。体力バカで」

アスナがそう言った瞬間、

フワッ

優しい風がアスナの背中側から吹いた。

「ん？」

アスナは風が吹いた、このかがいる右側とは反対の左側を見る。

そこにいたのは1人の少年だった。

歳は十歳程度だろうか？

赤い髪と黒い髪を持ち、瞳は茶色の外国人だと一発で分かる。

その小さな背中には似合わない大量の荷物を背負い、何やら長い棒のような物もある。

少年はアスナの方を見ていた。

そして口を開く。

「あの、すみません。麻帆良女子中等部にいる学園長さんに会いた  
いんですけど、どこにいるか知りませんか？」

「……………はあ？」

アスナは訳がわからなかった。

何故こんな場所にこんなガキがいるの？

彼女の彼に対する第一印象はそんな物だった。

物語は始まる。

今ここに、二人は出会った。

## ブログ・二人の出会いはこんな感じ（後書き）

修正しながら投稿しているので少し時間がかかります。  
後アスネギは最高だと思う。異論は認める。

第一話・やって来たお子ちゃま先生、ネギ！

まあ、最初は驚いたけど。

だってガキよ？十歳のガキ。

普通驚くって。

しかもただの迷子には絶対に見えなかったしなあ……

さて、愚痴はこれくらいにしますか。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第一話・やって来たお子ちゃま先生、ネギ！

「はあ？あんた何？」

アスナは立ち止まり、ジロリ、と少年を見る。  
ここは女子中等部玄関付近。

普通は男は教師しかいないし、子供もいない。

つまり、目の前の少年は怪しさマックスなのだ。

だが、

「おじいちゃんに何か用事でもあるん？」

「おじいちゃんってことは、お孫さんですか？」

ズテン！と見事にアスナはすっ転んだ。

二人に不思議な物を見る目で見られながらも、アスナは頭を抑えながら起き上がる。

「いや、このか！その前になんでこんなガキがここにいるのか聞かすべきでしょうが！」

「むっ……」

「まあまあ、落ちつきい。ほら、スーハー」

「え、え？スーハースーハー……」

このかに釣られ、アスナは深呼吸。  
息をすっかり吐き終わり、改めて少年を見る。

「で？なんでアンタみたいなガキがここにいんのよ？」

「またガキって……えつと」

アスナの言葉にムツとしながらも、少年が言おうとした所で、

「おい、ネギ君！」

「えっ？」

「あっ！？」

その声が聞こえてきた校舎の方に三人は顔を向ける。  
校舎の二階窓から顔を除かせている男性は、高畑・Ｔ・タカミチ。  
スーツを着込み、眼鏡をかけているその姿はどう見ても教師だ。

「た、高畑先生!？」

「おはよーございまーす」

アスナは慌てふためき、このかは笑顔で挨拶する。  
アスナも挨拶を、

「お、おはよーございまー久しぶりー!タカミチ!」……えっ?」

出来なかった。

というより、久しぶり?

思考がこんがらがったアスナに、更に爆弾発言が上よりやって来る。

「麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう? ネギ先生」

「ちょっとビックリしすぎたけどね」

……はっ？What？先生？ティーチャー？

「え……？せ、先生て？」

天然にもほどがあるこのかでも、今の言葉が信じられなかった。  
アスナなど、思考が完璧に停止し、強張った顔で彼を見る。

彼ははい、と言った後、一回ゴホンと咳払い。

彼は告げた。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから宜しくお願いします」

そう言つて頭を下げたネギの言葉を、頭の中で反復して、

「……え、ええええええええええッ!？」

麻帆良の空に、アスナの絶叫が響き渡った。

「ふむ、よく来たの。っと？どうしたのじゃ？頭を抑えて？」

「いえ……」

学園長室、そこでネギは荷物を下ろし、スーツ姿で立っていた。  
ちなみに学園長の言う通りに頭を抑えてる。

何故かというタカミチからネギが担任になると聞いたアスナが錯乱（？）し、ネギの頭を掴んで持ち上げたからだ。

一体どんな握力と腕力だ……

ネギは心の中で呟く。

近くにアスナとこのかがいるため、呟けないというのもあったが。  
長いヒゲを触りながら、学園長は言う。

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を……そりゃまた大変な課題をもちうたのー」

「は、はい。よろしくお願いします」

修行という言葉に首を傾げる二人。だが声には出さず、ネギを見る。

「まずは教育実習とゆーことになるかのう」

「分かりました」

「ところでネギ君には彼女はおるのか？とーじゃな？うちのこのか  
「ややわじいちゃん」

ゴチン！

余計なことを言った学園長の前頭部に金槌が衝突。やったのはいつ  
のまにか学園長の隣に移動したこのかだった。

その光景にネギは内心恐怖してたりする。だって、ねえ？  
そんなことを考えているあいだに、アスナは抗議していた。

「ちょっと学園長先生！こんな子供が教師するだなんておかしいじ  
やないですか！しかもうちの担任だなんて！」

「ふおおおお」

訴えを笑いで流す学園長。ちなみに頭からはギャグなように血が噴  
出中。

それを見てアスナは諦めてすごすごと下がる。

「はあ……なんでこんなチビッコがうちの担任に……」

「アスナ。元気だしーや」

「さて、ネギ君。この修行を恐らく大変じゃぞ」

突然、学園長の纏う雰囲気が真面目な物へと変わった。

それを感じ、アスナとこのかも背筋がピシツとなる。

ネギは言わずもがな、だ。

「ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスは無いが、その覚悟はあるのじゃな？」

それは、十歳の子供に問う質問にしては、少しばかり重い。

アスナ達は知らないが、ネギはこの修行に夢の全てが掛かっている。その夢のために、思いのために、ネギは血がにじむような努力を重ねてきた。

覚悟はとうの昔に出来ている。

「はい」

たった一言だが、その言葉に含まれた重みと顔は、十歳にはとても不相応だった。

（コイツ……）

アスナはそれを見て、思わず顔を見つめてしまう。

アスナにとって子供というのは、ワガママで、自分勝手に、そのくせ一人じやなにも出来なくて。そんな存在だ。

だが、目の前のネギは違う。

他の子供とは明らかに違う。

まるで精神だけ大人のようだった。

アスナはネギの顔を見ながらそう思った。

「そうそう、アスナちゃん、このか。ネギ君を暫くお前達の部屋に泊めてくれんかの？」

「ちょぉ！？」

なんで！？とアスナは心の中で悲鳴を上げた。

「ふう、途轍もなく疲れたよ……」

時間飛んで放課後。

広場にてネギはため息をはいていた。

あれから色々あり、あんなにか泊めたくないわだの教室のトラッ

ブだの消しゴム攻撃だの。  
正直言っても疲れる。

「僕、神楽坂さんに何かしたかな……」

ちなみに何が原因かこのかさんに聞いてみたら、「照れ隠しみたいなもの」と。  
後、タカミチの授業じゃ無くなったことによるイライラ、らしい。  
正直、先生になるだの担任になるだの、ネギが決めたことでは無いのだが。

「うう、でもなんとか仲良く……あれ？」

ネギはふと、視界に何かが入った。  
見ると、本を大量に持った女子が手すりの無い階段を歩いている。

「あんなに一杯本を持って……」

ネギは嫌な予感がした。  
そして予感は的中する。

ガクツと足を踏み外したのだ。  
大量の本とともに彼女、宮崎のどかは落下する。  
高さは十mはある。

落ちたら痛いじゃすまない。

「くっ！風よ！」

ネギは立てかけてあった杖を取り、のどかが落ちそうになっている場所に向かって振るう。

フワッと風がのどかと本達を浮かせた。  
その僅かな間にネギは滑り込み、キャッチ。

「ほっ。大丈夫ですか宮崎さ……」

言葉の途中でビダッ！とネギは固まる。  
何故なら、

「あ、アンタ……」

（ばれたー！？）

固まって此方を凝視している姿を見れば一目瞭然。

（なんでよりにもよって神楽坂さん！？）

魔法使いの正体はバレ、  
少年と少女の運命は深く絡み合う。



第一話・やって来たお子ちゃま先生、ネギ！（後書き）

まだ原作と殆ど違いませんね。

本当に違ってくるのはエヴァンジェリン編からなので……

## 第二話・本当の魔法は・・・

アスナに魔法がバレた時ネギ君相当焦ったやろおなあー。  
アスナもポカーンとしとったみたいやし。

だって魔法少年、やもんなー。

じゃ、続き始まるやえー。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第二話・本当の魔法は・・・

「あ、あの……その、これは……」

只今、魔法先生ラステルネギ（？）はピンチに陥っていた。  
一般人に魔法を見られてはいけない。  
これは魔法使いとしての代表的なルールだ。

\*ちなみに破ったらオコジヨにさせられます。

ネギは言い訳が思いつかず、口ごもる。  
ふと、ネギの腕の中にいたのどかが動いた。

「うつ……ネ、ネギ、先生……？」

その一言が切っ掛けとなった。

固まっていたアスナは自慢の超スピードでネギを確保（ついでに杖も）。

そのまま抱えた状態で走り去る。その間、約八秒。

「え、えつと……？」

のどかはその走り去ってゆく背中を見て、状況について行けてなかった。

ダンッ！と襟首を捕まれた状態でネギは木に押し付けられる。  
そこから尋問がスタート。

「あああなたやっぱり超能力者だったのね！？」

「い、いやちが」

「ごまかしたってダメよ目撃したわよ現行犯よ！！」

「あううっ！」

ネギ、ごまかせず。アスナに迫られ若干涙目になっている。

「白状なさい！超能力者なのね！？」

「ボ、ボクは魔法使いで……」

「どっちだって同じだよ！」

バツサリ一刀両断。

ネギはうつつと呻き、杖を手にとってアスナを見る。  
アスナはその視線に何かを感じ、後ずさった。

「仕方無いですね……」

「な、なによ？」

杖を包んでいた包帯が何故か勝手にほどけ、杖の上部が露出する。その先端を、ネギはアスナに向けて、

「悪いですが、知られたからには記憶を消させてもらいます！」

「えっ、ちょ！？」

記憶を消すのにはいくつか理由がある。

魔法使いの存在を公にしないためでもあり、危険に巻き込まないためでもある。

魔法は危険な物で、悪い人間もごまんと入る。

この世界では、魔法の存在を知っているだけで危険な目にあいかねないのだ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

たがらネギは記憶を消す。

危険に誰かを晒すのはいやだからだ。

「時の精霊よ、いざ来たらん。我に宿りて時を消しされ。水のごとく、夢のごとく」

魔法陣が杖の周りに展開され、振るわれる。

アスナの周りに帯のように出現し、空気に溶けるように消えていった。

「……ふう、これで大丈夫かな」

「……？ あんた何してんの？」

「……へ？」

アスナが首を傾げながら言ったので、ネギはまさかと思いつつも聞いてみる。

「あのー……神楽坂さん。僕は何でしょう？」

「魔法使い」

「………！？」

「は、はああ！？なんで！？術式は完璧だったのに………」

ネギは思わず叫び、もう一度魔法を発動する。  
今度こそ……

だが、水色に光る帯は役割を果たさなかった。

アスナは相変わらず？マークを頭に浮かべ、ネギは絶賛混乱中。？

タカミチが来るまで、この状態だった。

「で？その魔法使いがなんで日本なんかで教師をすることになったのよ？」

夕暮れの光を浴びながら、アスナはネギに問いかけた。

あの後うまいことタカミチをごまかし、逃げたのだ。

「えっと、修行のためです。立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるための」

「……は？」

ネギから出て来た単語に首を傾げる。

「マギ？なにそれ？」

「え、えーと、立派な魔法使いの仕事は世のため人のために陰ながらその力（魔法）を使う、魔法界でも最も尊敬される立派な仕事の一つです」

ネギの説明を聞き、ほうほうとアスナは頷く。

魔法使いといってもアニメで見るとは少し違うらしい。

「今はなんていうか、その、仮免期間のような物で……」

「ふーん。それで？魔法が人にバレたらどーなの？」

「か、仮免没収の上、強制的に連れ戻されます……ひどい時はオコシヨにされちゃって」

「あつ、そこは魔法少女っぽいのね」

ネギが涙目ながら言った言葉に、アスナは素直な感想を述べる。  
魔砲少女みたいな感じばかりでも無いらしい。

ネギは魔法少女？と思いながらも続ける。

「ですから、あの。他の人にはこのことを黙っていて貰えないでしょうか？」

「えー？」

アスナは不満そうにぶーたれる。

ネギとしては自分の夢のためでもあるが、アスナ自身のためでもあった。

魔法使いの存在を知っていることがバレると、誰かが記憶を消しに来るかもしれない。

だが、ネギは恐らくその魔法使いじゃ消せないだろうと思う。

先程の魔法は確かにきくはずだった。まるでレジストのように掻き消えたが、どうもおかしい。

もしかすると、彼女はとんでも無い存在かも……

へたすると、攫われたり……

「まあ、いいわ。アンタのおかげで本屋ちゃん助かった訳だし」

「あ、ありがとうございます！」

ネギはその言葉にとても感謝した。

場合によってはタカミチか学園長に話さないといけないだろうから。

「それにしても魔法使いかぁ……ほれ薬とか無いの？」

「無いです」

「使えないなあ」

「いや、ほれ薬とか何に使うんですかって、分かりきってますね……」

ネギはアスナがタカミチのことを好きだということを思い出して、苦笑する。

荷物を取りに教室に戻りながら、二人は話し続けた。

「じゃ、お金のなる木は？」

「いや、言ってる意味が分からないんですが……」

「じゃ、読心術！」

「使えるけどしません！」

「えーケチ」

「タカミチに読心術なんかしたら一発でバレます！」

そう言い合いながら、二人は教室の前に立つ。  
アスナが扉を掴み開け放つと、

パパーン！！

大きなクラッカーの音がいくつも鳴り響き、

「ようこそ？ネギ先生ーッ！！」

盛大な歓声が響いた。

教室の入り口に立つネギとアスナの近くにカラーテープや紙吹雪が  
落ちる。

「へ？」

「あ……そーだ。今日アンタの歓迎会するんだっけ……忘れてた  
！」

「ええええ！？」

アスナから告げられたサプライズに驚きをネギは隠せなかった。

「ほらほら、主役は真ん中」

「あ、ありがとうございます」

周りに急かされ、ネギは真ん中らへんの席へと座る。  
机のうえには大量のおかしと食事が。

「特製肉まん食うといいネ」

「ジュースもあるよー」

「あつ、はい」

ネギがジュースを飲みながら周りを見ていると、

「あ、あのー……ネギせんせい……」

「え……？あ、二十七番の図書委員、宮崎さん」

「あのー、さっきはそのー、危ない所を助けていただいてそのー、あのー」

ネギに向かって何かを差し出し、それをネギは受け取る。

「これはお礼ですー、図書券……」

「えっ！？い、いえその……」

「おおー！」

「本屋がもう先生にアタックしてるぞー！」

周りが面白そうにのどかを冷やかす。

ソレを聞いたのどかは顔を赤くするが、

「センセ私からもコレを……記念です」

「ぶっ！？」

その場にいたネギを含むほとんどの人間が吹き出した。

何故なら雪広あやかが自信満々に取り出したのはネギを象った銅像だからである。

仕事が早い。

「アンタばかじゃないの！？」

「なっ……アナタに言われたくないですわアスナさん！」

アスナの言った言葉にあやかが反論し、取っ組み合いの喧嘩がスタ

ート。

周りもはやし立てヒートアップ。

ネギが冷や汗を垂らしながら止めるか迷っていると、

「はっはっはっ。アスナ君はいつも元気だねえ」

ピタッ！とアスナは石像のように固まる。

そしてゆっくりゆっくりと、声の発信源の方に首を向けた。

そこにいたのは爽やか笑顔を浮かべた高畑教員。

「……」

愛しの高畑先生に喧嘩の最中で乱れまくった姿を見られたアスナは、  
白く燃え尽きた。

会も終わりに差し掛かった頃、アスナは階段に座りため息を吐いていた。

その脳内ではネガティブ思考が渦巻く。

「ハア……」

「アスナさん、大丈夫ですか？」

「うわっ！？アンタいたの！？」

突然現れたネギに、アスナは体をびくらせて階段から飛び起きる。

「はい。アスナさんの姿が見当たらなかったの」

ネギは笑いながら言う。

アスナは踊り場に立つネギを見て再度ため息を吐いた。

「あのねえ、主役が会抜け出してどーすんの」

「いえ、アスナさんの事が気になったので……だ、大丈夫ですよ！  
タカミチはアスナさんの事好きだと思いますし！」

「それは先生としてでしょ……いいのよどうせ、ただの片思いだったし……」

目に涙をためながら、彼女は口を開く。

「それともなんか、アンタがしてくれるの？」

その視線を受け、ネギは少し間を開けて語り始めた。

「……確かにタカミチの気持ちは読心術を使っても完璧には分からないし、惚れ薬も所詮偽りの感情でしかありません」

魔法っていうのは万能じゃないんですね、と苦笑いしながらネギは続ける。

「僕は思うんです。こんな時は、魔法に頼ってもだめなんだって。本当の魔法の力じゃないとだめだって」

「本当の……魔法……？」

「はい」

意味の分からない言葉に戸惑うアスナに、ネギは優しく言った。

「僕達の魔法は万能じゃない。僅かな勇気が、本当の魔法なんです」

背中側から太陽の光を受けながら、彼はそう笑顔で言った。  
思わずアスナが見とれてしまうくらいの、笑顔で。

「……な、何、真顔で言ってるのよ」

「あ……」

慌てて目をそらし、階段を降りる。  
だけど、三段ほど降りた所で立ち止まり、不安気な顔をしていたネ

ギの方をくるつと向く。

「分かったよ。私……勇氣出す」

ツインテールがなびくその笑顔は、とても綺麗だった。  
それを見てネギはほっとした表情になる。

「ーと、その前に告白の練習させてよ」

「……え？」

アスナの口から放たれた言葉に、ネギは思考が追いつかずマヌケな返事を出してしまった。

「練習もせずに告白なんかできないでしょ」

ネギの下段に立ち、アスナはドンドン話しを進める。

「あんだ今から高畑先生ね」

「あ、は、はい」

スルッ

アスナはツインテールに縛っていた鈴つきのリボンをほどく。  
髪が下るされ、アスナの背中に触れた。

ふう、と息を吐き、ネギを見つめて、

「好きです」

そう、一言言った。

ネギの心臓がドキン！と高鳴る。

「ずっと前から……迷惑、でしたか？」

「あ、いえ、でも……」

ネギはちゃんとした言葉が口から出せない。  
頭の片隅でお姉ちゃんに似てるといった？ 気な考えが展開されている。

「やっぱりダメですよ、私なんか……」

悲しそうな顔をし、アスナはネギに背を向ける。  
ネギは思わず、

「そ、そんなこと……！」

ガシッとアスナの肩を掴んでいた。  
当然足場が狭い階段で急にそんなことをすればバランスを崩す。

「あ」

「……つと」

何とか倒れるのは免れたが、顔が急接近していた。  
十センチも無い。

お互いの息が顔にかかる。

二人の鼓動はとてつもなく早くなっていた。

「……この先の練習も、いい？」

「えっ……」

ネギの頬にアスナの両手が優しく当てられる。

「目を……閉じて……」

顔を真っ赤にしながらも、ネギは目を閉じる。  
そしてドンドンアスナの顔が、唇が接近し……

ムニユ！

ネギの頬が左右に引つ張られた。

「……えう？」

「ふ、ふふふふ。ひっかった」

「あうつ!?!」

たまらなくなつたのか、爆笑が巻き起こる。

「あはははは! アンタ今キスされるかと思つたでしょーっ!」

「い、いやその!」

「まったく、子供の癖におませさんねー!」

「う、うぐー」

先程とは別の意味で真つ赤になつたネギの頬をムニムニとめて遊ぶアスナ。

が、アスナは笑いすぎて気づかなかつた。

パシャパシャ!

「えっ?」

二人してその光が来た方向を見ると、そこにはカメラを構えた女子、朝倉が!

他にも数名、二人を信じられないという表情で見ている。  
特に犯罪者予備軍シヨタコンのあやかさんが。

「ア、アスナさんあなた……」

「あ……」

「う……」

プルプル震えるその姿を見て、二人は改めてマズイ事態になったと気がついた。

だが時すでに遅し。

「ここに、こんな小さい子を連れ出してアナタは一体何をやってたんですかーっ!!」

「ち、ちがー!」

「何が違うのですか!こ、こういつコトだけは絶対にしない片だと思ってましたのに!」

「こ、誤解よ委員長!」

アスナは必至で弁明するが、暴走している委員長は止まらない。

しかも周りもギャーギャー騒ぐものだから收拾がつかない。

「ほらあんた、じゃなくて先生から何か言ってくださいよ!」

「えうつ!?!」

突然振られ、ネギは慌てる。

「言い訳は見苦しいですわアスナさん!」

「え……いや……」

ギャーギャー!

「ほら先生早く!」

ギャーギャー!!

「その……」

ギャーギャー!!!

グルグル頭が混乱し始めたネギが取った行動は!

「ら、ラス・テル・マ・スキ「やめえい！」へブツ!？」

記憶除去の魔法を使いかけましたまる。

「はあ、ほんとにひどい目にあつたー……全部アンタのせいよ!」

「今のは自業自得だと「なんか言つた?」すみません……」

はあと、ネギはため息をつく。

これから自分はやっていけるんだろうか。

夜の道をアスナの隣を下を向きながら歩く。

「アスナー」

前方を歩いていたこのかが、アスナを呼ぶ。

「さて、帰ろっか」

「あ、はいっ」

「ってあんた泊まる所決まってるんだっけ？」

あつ、とネギは思い出す。

色々あつて忘れていたが彼は泊まる所が無いのだ。

「いえっ、その……」

「……いいよ、来ても」

「えっ？」

その言葉に驚く。

あれだけ嫌がっていたというのに……

「……ま、さっきの言葉<sup>セリフ</sup>ちよつとぐつと来たかな」

ツインテールの片方をクリクリしながら、彼女は言う。

「このまま頑張れば、あんたもいつかはいい先生になれるかもね」

「あ……！ありがとうございます！」

フンと前へと進むアスナ。

そんな彼女を見ながら、ふとネギは名簿の存在を思い出し、開いてペンで書き込む。

アスナの所に「いい人」「お姉ちゃんに似てる」と。

少し欠けた月を見ながら、ネギは心の中で呟く。

「お姉ちゃん、アーニヤ、おじいちゃん、スタンさん……父さん。色々不安もあるけど、立派な魔法使いになれるよう、頑張ります！」

「何してんの行くよー」

「はい！」

ネギは走り出した。

月は照らす。

少年の歩く道のりを。

### 第三話・居残り補習と魔法少年の夢

……私、ですか。一体どういう人選……

あの頃はネギ先生は不安だらけだったでしょう。

その中でアスナさんは頼れるお姉さん代わりだったのかも知れませんが。

アスナさんの存在がネギ先生にとって、とても大切になったのはソレも理由の一つではないでしょうか？

さて、お嬢さまを待たせているので……

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第三話・居残り補習と魔法少年の夢

神楽坂アスナの朝は早い。

四時半に携帯のアラームが鳴り響き、アスナの意識を覚醒させる。  
アスナは目をすりながら携帯のアラームを止めた。

「ふぁ……」

大きなあくびを一つ。

そしてゆっくりと、ルームメイトを起こさないように二段ベットから降りる。

チラッと外を見るとまだ暗い。

「……よし」

アスナはパジャマを脱ぎ始める。

赤色のパジャマをあつという間に脱ぎ、ポイツと投げる。

上下のパジャマは毛布の上に落ちた。

「……毛布？」

自分の思考に疑問を抱き、アスナは毛布を見る。

アスナは毛布を下に落としてないし、このかはくるまって寝ている。

そこまで考えて、

ガチャ！

「おはよーございま……?」

さて、状況を説明しよう。

何故か入ってきた少年、ネギはタオルを肩にかけている。手には杖。魔法の練習でもしていたのかも知れない。

対するアスナは先程述べたようにパジャマを脱いでいる。短絡に言つと完璧な下着姿。

つまり、

「……」

「えっ? ちょ!?! なんかゴゴゴツって怒りの擬音が聞こえるんですが!?! ま、待つてください落ち着いて!?! その振りがぶつた拳を下ろしガボツ!?!」

ネギは朝早くから早速気絶と言う名の二度寝に以降した。

遅刻しないために走り続ける大量の生徒達の中で、少女の怒りの声がひびく。

「たつく、アンタのせいで遅刻寸前じゃない！」

「だから何回も謝ってるのに……」

シユン、とネギのアホ毛がしなる。

朝、アスナからいいパンチを貰ったあと、ネチネチ言われてるのだ。ネギとしては見たくて見た訳ではないのだが、見た事実は変わりにい。

「あーもう！ほんとアンタなんか泊めるんじゃないかった！」

「なんや、仲いいなー二人共」

「「……どこが（です）？」」

「ほら、喧嘩するほど仲がえーて」

「……このかって本当に天然というか、なんというか……」

「へー、日本にはそんな言葉があるんですね」

アスナはこのかの天然っぷりに呆れ、ネギは日本の文化に感心する。まあ、このこのかの言葉で喧嘩も終了し、三人は更に速度を上げた。

「じゃ、私達こっちだから」

「またなネギ君」

「はい、教室で」

三人は遅刻せずに校門を潜り、下駄箱で分かれた。

「ってあれ？届かない……」

が、早速問題が発生した。

大人用に作られている下駄箱に、ネギは届かないのだ。中学生でも楽に届くがネギは十歳、日本で言うなら小学四、五年生である。

背伸びをして頑張るが、どうしても届かない。

と、ネギの横合いから手が伸び、下駄箱の扉を開けた。

サラサラした金髪に青い目。

雪広あやかである。

「おはようございますネギ先生。教室まで御案内しますわ」

「ど、どうも。おはようございます、いいんちようさん」

ネギはなんで居るのか気になったが言わないことにした。正しい判断です。

「雪広あやかでございます。昨晚はよく眠れましたか？」

「ええ。ちょっと早起きしてしまって、きぜ、じゃなかった。二度寝してしまいましたけど……」

「？」

冷や汗を垂らしながら言うネギを見て、あやかは首を傾げる。ネギはとてもよく寝れたのだ。初めての異国の就寝だったのに。ただ目が早く覚めてしまい、身体強化魔法の練習をしながら走り、部屋に戻った所で……

「うっ……」

「どうしました？顔が真っ赤に……」

「だ、大丈夫です……」

ちやつかりしつかりバツチリ下着姿を脳に焼き付けているネギ先生だった。

そうこうしている間に教室の前に立ち、顔を振って少し冷やした後、にガラツと開ける。

ちなみに、頭の上から振ってきた黒板消しはあやかがナイスキャツチ。ソレを見て舌打ちをした人物もいたが。

「き、起立ー」

ネギが教壇の上に立つと、日直であるのどかが号令をかける。

「気をつけー、礼ー」

『おはようございますー!!』

「お、おはようございます」

これだけの人数の年上の人に挨拶されたことはないため（というより十歳でそんな経験してる方がおかしい）ネギは多少どもりつつ、挨拶を返す。

「着席ー」

ガタガタと音を立て、教室の生徒達は全員着席する。

（しっかりやんなさいよー）

（わ、分かってますよ。アスナさん）

アスナがそんなことを口パクで言ってきた気がしたのでネギも口パクで返す。

「じゃあ一時間目を始めます。テキスト76ページを開いてください」

チョークとテキストを持ってネギが言うと、パラパラページを開く音が教室に満ちる。

全員が開き終ったのを確認し、ネギは英文を歩きながら読む。さすが英国人。英語の発音も完璧である。

「ー今の所、誰かに訳してもらおうかなあ。えーと……」

ネギがそう言って教室の生徒達を見ると、半分くらいが冷や汗を流しながら顔をそらす。

こういうのは何故か大概、わからない人に当てられる。

今回も、

「じゃあアスナさん」

「なっ、何で私に当てるのよっ!?!」

顔を限界までそらし、ペン回しをしていたアスナは怒鳴って立ち上がる。

「えっ?だって……」

ちなみに、ネギはその「顔をそらした奴はその問題がわからない」法則をもちろん知らない。

だからアスナの反応も理解できず、

「フツ―は日付けとか出席番号で決めるでしょ!?!」

「でもアスナさんア行じゃないですか……」

「アスナは名前じゃん!」

「後、感謝の意味も込めて……」

「何の感謝よっ!?!」

アスナが何故必至になっているのかわからないネギは、アスナのどこか必至な態度に後ずさる。  
と、そこへ。

「要するに分らないんですわね、アスナさん」

「なっ!？」

あやかが見事に当てた。というかまるわかりだが。  
挑発するような口調であやかは続ける。

「では委員長のわたくしが代わりに……」

「わ、わかったわよ訳すわよ」

アスナは意地を張って冷や汗を垂らしながらも読み始める。

「ジェイソンが……花の上に落ち春が来た？ジェイソンとその花は……えと、高い木で食べたランチで……骨が……百本？えーと……骨が……木の……」

この問題は意外と難しい部類に入るかも知れない。  
だが、所々絶対にあり得ない訳をしているのだが？

「アスナさん、英語苦手なんですか？」

ネギの問いかけにアスナが何か言う前に、ここぞとばかりに周りがいい始めた。

「アスナは英語だけじゃなくて数学もダメですけど」

「国語も……」

「理科社会もネ」

「要するにバカなんですわ」

あやかが結論を言う。

確かにアスナはそれはそれはバカだった。

世の中、数学が異常によくて英語が絶望的な人間もいるが、アスナは勉強自体がダメだった。

「いいのは保健体育ぐらいで」

アハハハ

アスナは恥ずかしさの余り顔を真っ赤にする。穴があったら入りたい

い気分だ。

が、救いの手はあった。

「まあまあ、人間だれしも苦手なことはありますし」

ネギ・スプリングフィールドである。

彼は続ける。

「大事なものは頑張るか頑張らないかですよ。僕だって運動は苦手でしたけど、頑張ったらなんとかになりましたし」

「ネギ・・・・・・・・」

いつの間にか静かになった世界で、アスナはネギが天使に見えた。

が、

「そつえばネギ先生はどれくらいで日本語覚えたの？」

「えっと、三週間です」

今度は十歳の子供に負けたという絶望感に打ちひしがれた。  
まあ、これはネギが天才すぎるだけだが。

時はたち、放課後。

「えー、という訳で2 - Aのバカ五人衆レンジャーが揃ったわけですが……」

「誰がバカレンジャーよ!？」

綾瀬夕映の言葉に、アスナは机を叩いて怒鳴る。

人と色は、

アスナがレッド、長瀬楓がブルー、佐々木まき絵がピンク、クーフ  
エイがイエロー、そしてリーダーたる夕映がブラックである。

ちなみに、確かにヒーロー戦隊で「メレンジャー」という、色も  
同じでブラックがリーダーの物がある。まあ詳しくはグーグル先生  
へ。

今、何故この五人+後方のどかにハルナに二人いるのかというと、ネギが居残り授  
業をしよう!と、しずな先生から貰った居残りさんリストを見なが

ら思ったからだ。

「いーのよ別に勉強なんかできなくても。この学校エスカレーター式だから高校までは行けるのよ」

「うつ……あつ！」

アスナの態度に呻くが、いい名案が思いついた。

「でも、アスナさんの英語の成績が悪いとタカミチも悲しむだろうな」

「？つ……わ、わかったわよ。やればいーんでしょ、やれば」

罰が悪そうな顔でしぶしぶやると言ったアスナに、ネギは心の中でガツポーズ。

ネギ、人のやる気を出す方法を一つ覚えた。

一時間後、

ズーンと黒い陰がアスナの周りに浮かんでいるように見えるくらい、アスナは落ち込んでいた。あとちよつとでダークサイドに落ちてしまいそうだ。

ネギの教卓の上には小テストの用紙があつた。大量に。

ネギのこの補習を抜ける条件は一つ。十点満点の小テストで六点以上とること。

最初はマジメにやれば超できる子の夕映が九点で合格のどかハルナとともに帰っていった。

残りの四人は三人が三点から四点、そしてアスナが二点で不合格。

それからネギがポイントを教え、再テスト。

クーフエイ、楓が八点で合格。クーフエイは日本語も覚ええないといけないから大変らしい。

そしてまき絵も六点で合格。

アスナ、一点。

と、いうわけで教える、テスト、教える、テスト、教える、テストの繰り返し。

結果は……

ネギは筋肉がガチガチに固まった笑顔で机の上を見る。

三点、二点、一点、四点、三点、二点……

問題の内容はたいして変えてないのに、どうして点数が上がったり下がったりするのだろうか？

よっぽどのバカでも一時間もやれば、六点くらい取れるはずなのに。

窓の外は夕暮れに染まり、カラスがアホーアホーと鳴いていた。

「もういいわよ……私バカなんだし……」

「ああっ！アスナさん諦めないでえ！」

ダークフィールドを展開していたアスナはボソツと自虐する。

ネギは必至に励まそうとするが、

「おい、調子はどうだい？ネギ君。おっ、やっぱり例によってアスナ君かー」

「たっ……！？」

とどめを刺す一言。言ったのはダンディ高畑。

「あんまりネギ先生を困らせちゃだめだぞー、アスナ君」

「た、高畑先生……いえっ、あのっ、これは……」

「じゃあ頑張つてね、二人とも」

アスナが何か言う前に、タカミチはハッハッハッと爽やかな笑顔を浮かべながら歩いて行ってしまった。

「……」

「あ、あの……スナさん、そ、その……気にしないで……」

傷心し、プルプル震えるアスナに、恐る恐る話しかけるネギ。顔は青ざめ、冷や汗が垂れまくる。

だが、ネギのその勇氣という名の本当の魔法は、

「うわああーん！！！！」

「ああ！？」

逆効果だった。

アスナはノートなどを手に持ったまま教室を出て走る走る！叫びながら走る。

「まってアスナさんって早ッ！？」

ネギが廊下を見るとアスナはオリンピック新記録じゃねえの？って  
いうくらいのスピードで走っていた。

ネギは慌てて身体強化の魔法をかけ、杖を持って走る。

自動車なみの速度による、鬼ごっこが始まった。

「はあはあ……………」

「ぜえぜえ……………」

麻帆良学園にある巨大な湖。

その浜辺で二人は息を整えていた。

「ア、アンタ…………私の足に追いつくなんて、なかなか…………やるわね  
……………」

「ぼ、僕……戦闘用身体強化魔法……使ってたんですけど……」

ネギが使った魔法は「戦いの歌」。白兵戦用の魔法である。

つまり、これを使わないと追いつけないアスナの身体能力は異常だ。

「あーもうっ！」

だけど体力には限界がある用で。ドサッ！とアスナは浜辺に腰を下ろし、ネギと背中合わせになる。

「アンタ本ツ当にしつこいわね……言つとくけど、変なご機嫌取りはお断りだからね」

「そ、そんなぁ……ぼ、僕はアスナさんの先生ですし……それに困っている人を助けるのがマジステル・マジの仕事ですから」

「……ふうん」

チラッとアスナはネギの顔を見る。  
疑問に思ったことを、聞いてみた。

「ねえ、何でそんなに頑張るのよアンタ」

「えっ？」

「何でそんなに一生懸命なの？まだ子供なのに……」

「……それは」

ネギはちょっと迷うそぶりを見せるが、構わず告げた。

「実は僕、憧れている人がいるんです」

ネギは杖を強く握り締める。

「ただ、みんなはその人は死んだんだって言います。……でも」

杖を、立てる。

「でも僕にはあの人死んだとは思えない。あの方は、千の魔法を使いこなす最強の魔法使い『サウザンド・マスター』。世界を旅しながら、沢山の不幸な人達を救ってるんです」

ネギは杖を見ながら思い出す。

六年前の、あの雪の日のことを。

『お前がネギか……大きくなったな……』

『この杖をやる。俺の形見だ』

『元気に育て、幸せにな!』

「だから」

ネギは空を見ながら言う。

「僕はあの人のような立派な魔法使いになりたいんです。そうすれば、この広い世界の何処かであの人に、父さんに会えるかも知れない」

そう空を見ながら言う姿は、とても十歳には見えなかった。  
アスナはそのネギの顔を見て、

「……んー……」

くしゃくしゃ髪を掻き回し、

「あーもー! わかったわかったわよ! やればいいんでしょ勉強!」

「えっ？」

ネギは思わずアスナをまじまじと見つめる。

照れくさいのか、アスナはノートに乱暴に書き込みながら早口で言う。

「あんたがその、マギなんとかになるためには今の先生の仕事を上手くやんなきゃいけないでしょ？協力するわよ」

「あ……ありがとう！アスナさん！」

「わっ！くつつくなバカ！」

夜、

「よしできた！見なさいよーコレで完璧！ほらさっさと採点しなさいよー」

「は、はい！」

寮の部屋でアスナが自信満々に差し出したテストを受け取る。  
結果は、三点、五点、四点、三点。

「あっ……」

「なっ……！？」

「やっぱりアスナ勉強はダメやなー」

まあ、全体的に点数は上がったということで。まだまだバカだが。  
頑張れ、アスナ。

少年の夢を知るお姫様。  
自分が関わっていることを知らず。



### 第三話・居残り補習と魔法少年の夢（後書き）

さて、今回はストーリーがズレてます。

理由は惚れ薬騒動とお風呂イベントを無くしたから。

パワーアップしているネギじゃどっちとも無理なんですよね……

では。

#### 第四話・最終課題＋図書館島

はう、えつと、あの……今回は私です……

ネギ先生は魔法使いとして頑張っていましたー……。

それを横で支え続けたのがアスナさんで……

私は、そんなアスナさんが羨ましくて……

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第四話・最終課題＋図書館島

太陽が麻帆良学園をくつきりと照らし出し、陽光が空気を温める。  
その春らしい暖かさにあくびをする人は多い。  
そして、遅刻しないために全力疾走している人達も例外では無くて、

「ふわ〜あ……そろそろあつたかくなってきたなー」

「そーですねこのかさん」

ノンビリと言うこのかにネギは笑顔で同意する。  
春の訪れをまったりと感じたいが、

「こらあ！喋ってないでサッサと走りなさいよー！」

遅刻寸前の登校時には無理な話。

アスナはノンビリしていた二人に声をかけ急かす。

ダッシュで走る（このかはローラスケートで）三人に周りから声がかかった。

「ネギ君おつはよー！」

「やつほー？ネギ先生」

「あ、佐々木さんに和泉さん！」

「おはよー」

まき絵に和泉亜子である。

二人は三人に並走し、走り始める。

「この間のドッチボール面白かったねー」

「スカッとしたわ。ネギ君すごいなー」

「それほどでも……」

話に出て来たドッチボールというのは、ネギが麻帆良に来て一週間程経った時のこと。

高校生と喧嘩代わりにドッチボールをすることになったのだ。

最終的に結果は2・Aの圧勝。  
で、負け惜しみに向こうのリーダーがアスナにボールをぶつけよう  
としたのだが、

「まさか片手で取って握りつぶすなんてなー」

「本当。アンタの方が私よりバカ力じゃない」

「あっははは……」

実は魔法使ってましたとは言えないネギだった。

六時間目終了後。

廊下を日直の明石祐奈、椎名桜子と一緒に歩いていると、ネギはふ  
とあることに気がついた。

「……何か他のクラスの皆さんピリピリしてますねー」

そう、他のクラスの人達の様子が少し違うのだ。何やら集中しているというか、一生懸命というか……

「あーそだね。そろそろ中等部の期末テストが近いから」

「来週の月曜からだよ、ネギ君」

「へー学期末テストですかぁ。大変であって、ウチもそうなのでは！？」

二人から何げなしに伝えられた衝撃情報に、ネギは面食らう。

ちなみに、何故ネギが知らないかというとテストを作る人でも無いし、言わなくてもいいだと周りの先生が判断してためだ。

「あはは、うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係無いんだ」

「特にウチはズーっと学年最下位だけど大丈夫大丈夫」

「はううっ！？」

（大丈夫じゃないでしょあんまり！？）

ネギは心の中で叫ぶ。

「……………？あのお花みたいなトロフィーは？」

「あー、あれはテストで学年トップになったクラスが貰えるんだよ」

「へー……………」

金ピカに光るトロフィーを見ながらネギはどうにかするべきなのかなー、と迷う。

「でもなー、魔法を使っちゃう訳にも……………」

「ネギ先生」

「あ、はい？しずな先生？」

後ろから何か焦った様子で現れたしずな先生に、ネギは首を傾げる。

「あの、学園長先生がコレをあなたにつて」

そう言っ手渡された物を見て、ネギは思わず大きな声が出る。

「えっ！？僕への最終課題！？」

手紙には最終課題、と書かれていた。

ネギの脳内をドラゴン退治だの、魔法二百個取得だの大変な課題がよぎる。

恐る恐るネギが手紙を開けて見るとそこには……

次の期末試験で二・Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。

難しくないように見えて、実は最ッ高に厳しい課題の内容が書かれていた。

「終わった……」

ネギはボソツと教卓の前で呟く。  
まだホームルームまで少し時間があるため生徒達は互いに喋ったり遊んだりしていた。

その中でネギだけが唯一暗い。

理由は勿論課題。

要するに、

最下位脱出はほぼ絶望的。

ネギのクラスには学年トップクラスが三人もいる。

だが、だがしかし。あのバカレンジャーが悪すぎた。

トップをマイナスにしてしまい、しかも全体的に低い人が多い。

「うー……いや、諦めたらだめだね。よし！」

ネギは気合いを入れ、ホームルームを始めるうむをいい始めた。

？

「と、いう訳でホームルームは大勉強会にしようと思います！」

「いや、何がという訳なのよ」

アスナのツツコミが入るがネギはスルー。  
時間は無駄には出来ない。もうテストはすぐなのだから。

「はい？ 提案提案」

「はい！ 椎名さん」

ネギは桜子が手をあげたので、名前を呼ぶ。

「では！！お題は『英単語野球拳』がいいと思いまーすっ！！」

おおっ！！

「ちょ、皆さん！？」

周りが意見に賛成し、はしゃぎたてる。  
勿論、あやかの言葉を聞く生徒はいない。

そしてネギは、

「じゃあそれで行きましょう」

「え！？」

野球拳という物をサッパリ知らなかった。

生徒の自主性に任せるのもいいが、内容くらい聞いた方がいいのでは？

「ちょっとネギ！アンタ野球拳って何か知ってんの！？」

「じゃ、僕テキストの問題コピーしてきますね！」

アスナが言うが聞かず、ネギは教室を出て行ってしまった。

次にネギが今日、教室で見たのは2つ。

一つはアスナと他バカレンジャーの下着姿（アスナまき絵はブラジャー無し）。

もう一つは真っ赤に顔が染まったアスナから放たれたストレートパンチである。

ちなみに直撃のさいの効果音はメゴッ。

「……なあ、アスナさん？これどういうことだってばよ？」

「いや、その……」

麻帆良学園にある図書館島の地下深く。地底図書館と呼ばれる場所がある。

そこは何故か壁が光り、水が溢れ、本好きにとってはまさに樂園という幻の図書館。

そんな図書館の浜辺にて、バカレンジャー+このかは正座させられていた。

ネギ？

アスナを下から覗きこむようにガンつけてます。

「ねえ？アスナさん。俺さあ、学年最下位脱出したいしさ、させ

たいから問題集作ってたんですよ。英語だけじゃなくて全教科。国数理社英ゼーんぶ」

「ネ、ネギ君。一人称が変わって「シャラップ」……はい」

まき絵がいい終える前にネギは一言で黙らせる。

まき絵が小声で「こんなのネギ君じゃない……」と言うが、周りの人間全員同意である。

特に至近距離で睨まれてるアスナ。

「なのにい……何やってんの？魔法の本？」

「はい……」

「バカじゃねえのテメエラ！？自分で勉強しろやボケえ！雷食らわして脳みそ活性化させてやるおかあ！？」

「……………」

今回ばかりはネギの怒りももつともだった。

アスナ達は魔法の本を求めて夜にここに来た。  
理由はもちろん、学力アップのため。

それを職員室で問題を作っていたネギが知ったのは学園長からの電話があつたからだ。

2-Aの誰かが魔法の本を手に入れるために図書館に居ると聞き、

アスナに寮にいない人間を聞こうとしたら「只今、電源を切っているか、電波の届かない場所に居ます」。

もしやと思いこのか。

「只今、電源を切っているか、電波の（ry」

今、麻帆良で信賴している人間ベスト2と4に裏切られたネギはぶち切れ、図書館島のトラップ軍団を魔法で突破。  
現在にいたる。

「反省してるんですかあー？やっぱ一億Vの電気喰らってますかあ！？」

「『ごめんなさい! もうしません!』」

ダークネギによる説教はそれから三十分もあつた。

「全く……でも、特別授業の方がいいかも知れませんね」

痺れたーなどと言って横たわる人を見ながらネギは呟く。  
学園長先生のアドバイスでバカレンジャーメンバーを集中的に鍛え  
たら？ということになったのだ。

ネギの不在は何とかしてくれるらしい。

「んっ？」

ネギは気がついた。

アスナが左肩を庇っていることに。

「あー……アスナさん、こっちに来て下さい」

「えっ……？」

アスナは露骨に嫌な表情をするが、ネギは構わず右手を引っ張って  
行く。

他の人達が近くにいないことを再度確認し、物陰でネギは唱える。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。汝が為にユピテル王の恩  
窮あれ。治療」

ネギがかざした杖が光り、アスナの腕を包む。

「あれ？少しよくなったかも？」

「はい、治療の魔法です。応急処置程度ですが」

ネギはニツコリ笑いながら言う。  
アスナは思った。

（そうよね。さっきのネギはあれよあれ。気の迷いよ。そうそう）

実はまた説教じゃないかとビクビクしていたアスナだった。

三日後。

「重量オーバーデス」

「い、いやああああ!?!」

無慈悲なエレベーターの機械音声になった。  
状況をダイジェストに説明すると、

アスナが水浴びをしているのをネギ目撃。拳がヒット。

アスナ達、小学生からやり直しかいいうデマを信じてた。アスナ、  
傷のせいでネギに倒れ込む。

遠くで悲鳴が聞こえ、行ってみるとそこにはゴーレムが魔法の本を  
持っていた。

バカレンジャーご自慢の身体能力で魔法の本を奪って逃げる。

滝の裏口に非常口発見。問題を解き、中へ。

問題をときながら螺旋階段を登る登る! 直通エレベーターに乗り込  
む。

重量オーバーデス 今ここ。

「……僕が降ります! 皆さんは先に地上へ帰って下さい!」

ネギはエレベーターを飛び降り、杖の布を一気に解く。

「えっ!？」

「ネギ君!？」

「ちょっとネギ!？」

アスナが一際大きい声を上げるが、ネギは杖をクルクル器用に回しながら言う。

「大丈夫ですよ、アスナさん。ゴーレムの一体や二体に遅れはとりません。本を持って明日の期末を受けてください」

ニツコリ笑ってアスナにそう言い終え、ネギは高速回転する杖を両手に持ち、身を屈める。

「……フッ!」

前に飛び出そうと地面を蹴—

「ぐえっ!？」

ーられなかった。

後ろにいきなり引つ張られ、ネギはエレベーターの中へ。  
誰かに後ろから抱き締められる。

「アスナさん!？」

ネギは手の主を見て驚く。

「あんたが先生になれるかどうかの期末試験でしょ？あんたがいな  
いまま試験受けてもしょーがないでしょーが」

「えっ……?」

アスナの言葉に思わず惚けるネギ。アスナは半分呆れながら続けた。

「ガキのくせにカツコつけてもーバカなんだから!」

「で、でもこのままじゃあのゴーレムに……」

ネギは正気に戻り、アスナに訴えるが、アスナは腕を思いっきり振りかぶって、

「こーすんのよ！」

「そ、それは!？」

ブンッ!

アスナの右手から放たれたのは魔法の本。

魔法の本は回転しながらゴーレムに大命中。

重量オーバーではなくなり、エレベーターの扉も閉まった。

こうして、ネギ達は図書館島を脱出したのである。

時は飛んで十七時間後。

ネギはトボトボと駅までの道のりを歩いていった。

理由は単純明快。

だめだったのだ。課題失敗。

故郷へと帰らなければならない。

そう思いつつ歩いてた所で、

「ネギ！」

大きな女性の声が聞こえた。

ネギはそちらを向く。

五m先で立ち止まったその人物はアスナだった。  
息を荒くし、ネギを見る。

「アスナさん……」

「ゴ、ゴメン！本当にゴメン！私達のせいで最終課題落ちちゃって……魔法の本を捨てたのも私だし……」

アスナの謝罪に首を振りながらネギは少し悲しそうに告げる。

「いえ、そんなことないです。誰のせいでも無いですよ」

「ネギ……」

「魔法の本なんかで受かってもダメですし……結局僕が教師として未熟だったんです」

ネギはそう言って背中を向けようとするが、アスナが叫ぶ。

「ちょ、ちょっと！？そんなに簡単にあきらめちゃうの！？マギ……  
……なんとかになってサウザンなんとかって言われてる、お父さんを  
探すんじゃないの！？」

ネギは悲しそうな顔をして、黙って後ろを向き、駆け出した。

「バカ！」

が、後ろからガシツと抱き締められる。

ネギが驚いている間にも、アスナは続ける。

自分が言いたいことを率直に。

「行っちゃダメって言うてるでしょ！！そりゃ、最初はガキでバカ  
なことばかりするから怒ったけど……私なんかよりちゃんと目的持  
って頑張ってるから感心してたんだよ！なのに……」

「ア……アスナさん……」

思いにもよらないアスナの言葉に、ネギは少し顔を赤くする。  
そこへ、

「ま、待ってーネギ君ーッ！」

「ネギ坊主ー！」

「み、みなさん！？」

で、皆に色々言われた後、学園長がバカやってたのが判明。  
結果、

「なんと、2 - Aがトップじゃ！」

「や、やったー！！！」

盛大な歓声が響き、みんなは喜びあふ。  
ソレを見ながらネギは泣いていた。

「あれ？ネギ泣いてるの？」

「な、泣いてないですよ！」

そう言っ<sup>て</sup>ネギは目をこする。

嬉し泣きなど、ネギの人生の中で初めてだった。

「ははは、よかったね。ネギ。……ま」

ポンツとアスナの手がネギの頭に置かれ、くしゃつと撫でる。

「とりあえず新学期からもよろしくね、ネギ」

「は、はいっ……. よろしくお願いします、アスナさん！」

アスナは笑顔で言い、ネギも笑顔で答えた。

その後テンションが上がりすぎた2 - Aの生徒達がネギを胴上げしたのは、全くの余談だ。

お姫さまと主人公の絆は深まり、  
物語は加速してゆく。

#### 第四話・最終課題＋図書館島（後書き）

次からエヴァ編です。

## 第五話・桜通りの吸血鬼

ネギ先生はよく頑張っていたです。

今思うと、十歳の子供に出来ることではなかったですね。

エヴァンジェリンさんとも戦ったのですから、感心するばかりです。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第五話・桜通りの吸血鬼

麻帆良に向かう電車の中、ネギはアスナのかと一緒に乗っていた。  
ガタンカダんと、電車独特の効果音になる。

「いよいよ新学期、私達も中3ねー」

「はいっ」

近くに掴む物が無い為、アスナの腕を掴んでいるネギは答える。

「これからも一年よろしくな、ネギ君」

「はい、がんばりまっわわわ!？」

電車が急カーブしたのか、感性が働きネギは押し潰される。

このかとアスナの胸に顔を挟まれて。

「こ、このエロガキイ……！」

「ちょ、今のは事故！事故ですってば！」

「まあまあアスナ落ち着きい」

真っ赤な顔で右拳を振るおうとしたアスナだが、このかの言葉により動きが止まる。  
確かに事故だし、周りの迷惑にもなる。

「……次やったら承知しないわよ」

「はい……それにしても、春休みあつという間でしたね」

ネギはホッとしつつ言った。

春休みは本当にあつという間だった。

終業式後はパーティで千雨と仲良く？なり、学園内を双子と回り、あやかの家へアスナとこのかと行き、最終日の昨日はこのかと一緒に鬼ごっこ。

ハチャメチャだが楽しい春休みだった。

「あつ、そういえばネギ君。パートナー探しはもうしなくてええの

「？」

「あははは……探すにしてもまだずっと先のことですよ」

パートナー探しというのは、昨日来たネギの姉、ネカネの手紙の内容がデタラメに変化して噂になり、ネギが追いかけられたのだ。ちなみに本当はパートナーは結婚相手のことではなく、「魔法使いの従者」ミステル・マギのことである。

「……いざとなったら……」

「？なんか言った？」

「いえ、何でもありませんこのかさん」

「……」

「次は麻帆良学園中央です」

電車内に駅を告げる音声が鳴り響き、中にいる人がドアの近くによつてゆく。

「んっ。ネギ、遅れるんじゃないわよ？」

「ネギ君遅れんな」

「あははは……ちょっと厳しいかもです……」

プシューと音が鳴り、ドアが開いた。

一斉に大量の生徒達が走り出す。

ネギは余りの人波にスタートダッシュをミスってしまったそうなの。

「三年！」

「A組！」

「『ネギ先生ーっ！』……」

（バカどもが……）

（アホばっかです……）

あるドラマの出ししセリフのパクリをしながら歓声が上がる。  
クラスの後方にツツコミを心でしている人が二人いるが。

教室のプレートも取り替えられ、外は桜の花びらが舞う。

「えと、改めまして。三年A組担任になりましたネギ・スプリング  
フィールドです。これから来年の三月までの一年間、よろしく願  
いします」

「はい！」

「よろしくー？」

ネギの言葉に元気に返す生徒達。  
クラスを見渡し、ネギは思いを巡らせる。

（この一年間で三十一人と仲良くなれるかなあ……）

まだ話していない生徒達もいるなと思考している所で、

（ーッ！？）

鋭い視線を感じた。

前にもネギはこの視線を感じたことがある。

そう、タカミチに組み手をしてもらった時のような……

顔を視線が来た方に素早く向けるとその先には、一番列の後ろの生徒がいた。

何気なしにこちらを見てるだけの筈なのに、背筋がゾクツとなる。

慌てて視線を持っていた名簿に落とした。

（あの娘は……出席番号二十六番、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん……あれ？）

ネギはそこまで考えて、聞き覚えのある名前に冷や汗を垂らす。

「どーしたのよネギ？身体測定つてよ？」

「あ、いえ、少し考え事を……」

（まさか、ね……）

アスナは少しおかしいネギの態度に首を傾げるだけだった。

身体測定中、アスナはむー？と、首を捻って呻いていた。

「どうかしたのかなネギ……」

「アスナどうしたん？」

「いや、ネギがさ。何か様子が変だったから」

「うーん、何か悩みでもあるんちゃう？」

「だろうけどねって、アホな噂で騒ぐのはいいけどちゃんと並びなさいよ」

アスナはそこまで言って桜通りの吸血鬼の噂で盛り上がるメンバーに言った。

今はいつの間にかこのかの手によってチュパカブラと言う珍妙な生物が描かれていた。

「そんなこと言ってアスナもちょっと怖いんですよ」

「あんなのが日本に居る訳がな……」

ふと、言葉の途中でアスナは考え込んでしまう。  
もしかしてネギ（魔法使い）が居るんだから吸血鬼ぐらいいるんじゃないかと。

「ゲッ、まじでシャレになら無いわね……」

誰にも気づかれぬよう、ボソツと呟いたアスナの言葉に反応する者は……

「そのとおりだな、神楽坂明日菜」

「え？」

いた。

アスナがそちらを向くと居たのは見事な金色の髪に青い目を持つ、少女。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだった。

「ウワサの吸血鬼はお前のような元気でイキのいい女が好きらしい。十分気をつけることだ……」

「え……！？あ、はあ……」

エヴァンジェリンの言葉に、ただアスナは返した。

身体測定中にネギはまき絵が倒れていたという話を聞き、クラス

のメンバーと保健室にいた。

「ど、どーしたんですかまき絵さん!？」

「何か桜通りで寝ているところを見つかったらしいのよ」

「桜通りで……?」

ネギは周りがまき絵が倒れていた理由の意見を全く聞いてなかった。  
何故なら、

(わずかだけど、確かに魔力の残照を感じる……!)

まき絵から魔力の残照を感じたからだ。

分かりやすく言うなら、「魔法を使われた感じがする」ということだ。

ネギはうーんと悩みこみ、考える。

(僕以外にも魔法使いが?でも何でまき絵さんを?僕の知っている限りじゃ、まき絵さんは魔法のことを知らない一般の人なんだけど……)

「ちょっとネギ。何黙っちゃってるのよ?」

「あ、ちょうど良かった。アスナさん、桜通り関係で噂かなにかありませんか？」

ネギの突然の問いかけにアスナは答える。

「噂って、桜通りの吸血鬼とか？」

「ッ！それか……いや、でも……」

可能性は、高い。  
ネギは決心した。

夜、桜通りを一人で歩く少女がいた。  
宮崎のどこである。

他の四人は用事で別だ。

風が桜の木の間を駆け抜け、音を立てる。

「か、風強いですねー……ちょっと急ごうかなー」

そう言つて一步を踏み出すが、

「……？」

不自然に風が止んだ。

立ち止まって不思議に思つた瞬間、何かを感じ、のどかはふりかえる。

電灯の上に黒一色の何かが立っていた。

「ひ……」

「二十七番宮崎のどこか……悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ」

バサア！とマントをはためかせ、それはのどかに向かって飛んだ。

「キヤアアアッ！？」

のどかは悲鳴を上げ、ショックのせいで気絶する。

そしてソレが覆い被さろうとした所で、

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

「来たか」

道の向こうからネギは杖にまたがったまま詠唱を続ける。

「風の精霊十一人、捕縛となりて、敵を捕まえろ！魔法の射手・戒めの風矢！」

詠唱が終わると同時に、ネギの右手から風の矢が放たれた。

「ほう？氷盾……」

ソレから投げられた何かが宙を舞い、爆発する。

そして大きな氷の盾が生まれ、ネギの手から放たれた捕縛の風矢を全て弾き返した。

盛大な効果音と、衝撃波による煙が舞う。

「くっ！？」

ネギは一旦のどかを抱え、怪我が無いか確認した後、後ろに風の魔法でゆっくりと下ろし、前を見る。

煙が晴れ、魔女が使うような三角帽子が脱げ、空を飛ぶ。

「驚いたぞ。凄まじい魔力だな……」

「やっぱり、貴方ですか……」

ネギはその声を聞き、苦い顔で言う。

出来れば当たって欲しく無かった。

相手は、金色の長い髪に、青い瞳。

彼女は面白おかしそうな顔で、

「私のことを知っていたか、先生……いや、ネギ・スプリングフィールド」

「当たって欲しく無かったですけどね……」

心の中で思ったことを、ネギは口に出す。

「英雄サウザンドマスターに倒されたと言われている、究極の闇の魔法使い」

ネギの杖を持つ手に冷や汗が伝わる。

「異名は数しれず。真祖の吸血鬼、『不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトウ）』……」

ニヤツと彼女は笑った。

「闇の福音……！」  
ダーク・エヴァンジェル

彼女は、魔法界に名を轟かす、悪の大魔法使い。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルだった。

戦いが始まる。

少年の本当の意味での初めての戦いが。

第五話・桜通りの吸血鬼（後書き）

短くてすみません……

## 第六話・闇の魔法使いとの初戦

自分はどれだけちっぽけな存在なんだろうと、いつも思う。

早く大人になりたいって思う。

力が欲しいから。

誰も、傷つけないから。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第六話・闇の魔法使いとの初戦

手についた血を舐めとり、エヴァは不適に微笑む。  
対してネギは神経を目の前に集中し、攻撃に備えていた。

「……ふっ！氷結・武装解除！！」

「風花・武装解除！！」

エヴァが突然投げた試験管とフラスコの液体が空中でぶつかって混ざり、そこから氷の衝撃波がはじける。  
対するネギは全てを花びらにする突風でそれに対向した。

二人の真ん中で凍てつく風と突風がぶつかり合い、更に大きな衝撃波が周りに吹き荒れる。

「やるじゃないか」

「……」

エヴァの称讃の声を無視し、ネギは考え続ける。  
相手を分析し、適切な戦術をはじめだそうとすために、頭を働かせる。

だが、後ろからの足音に、ネギの思考は中断された。

「何や今の音!？」

「あつネギ!!」

「アスナさんにこのかさん!？」

「フフツ」

ネギが驚いて後ろを向いた間に、先程の衝撃波による煙に紛れるエヴァ。

それを見てネギは二人に慌てて言う。

「ア、アスナさんこのかさん!宮崎さんを頼みます!僕は犯人を追いますので、心配ないですから先に帰っててください!」

「え、ちよつとネギ君……」

「じゃあ!」

質問する暇を与えず、ネギは「戦いの歌」と風系の身体補助魔法を発動。

一気にエヴァが消えた方向へと走る。

通常じゃ絶対にあり得ない速度で走ったおかげか、

「いた！」

「！」

かなり早い段階で見つけられた。

「はい。そう言えば坊やは風が得意だったな」

そう言ってエヴァは歩道橋の上でいきなり左方向に移動し、手すりを踏みつけて空へと踊り出た。

マントがはためき、空を飛行する。

「空を杖や箒を使わずに飛んだ！？浮遊術？いや、マントか！」

ネギはそう判断しながら、空を杖にまたがって飛ぶ。

ネギは頭を使って戦うタイプだ。

戦術を組み立て、一つ一つ考える。

（でも、おかしい）

ネギは後ろを追いかけてながら一番の疑問を考える。

（魔力が少なすぎる。魔法の発動にいちいち魔法薬を使ってるし、いくらなんでもおかしい）

ネギは答えを出した。

（つまり、エヴァンジェリンさんには今なんらかの魔法がかかっていて、魔力が抑えられている！それならー）

子供のネギにも、勝つチャンスはある。

「エヴァンジェリンさん！悪いですが捕まえさせてもらえます！」

「ふっ、やれるものならな！」

そのセリフを合図に、二人とも一気にスピードを上げ、空を翔る。三十メートル程離れた所で、ネギは詠唱を開始した。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！風精召喚！剣を執る戦友  
！」

ネギの詠唱とともに周りにネギの形をした様々な風の戦士が出てくる。

その数合計八体。

「捕まえて！」

ネギの号令とともに、一気にエヴァに接近する。

対するエヴァは冷静に魔法薬を投げ、氷を生み出して一体一体を潰す。  
が、

「かかった！」

「……？ハッ！？」

エヴァは一瞬疑問に思っただけで理解するが、遅い。

風の中位精霊によるコピーは氷を食らった瞬間、爆散した。  
その爆風により、エヴァの動きが完璧に止まる。

「風花」

しかも、

「武装解除！」

ネギは爆風に紛れて接近していた。

エヴァは咄嗟に手をかざすが、完璧にレジストできずマントのコウモリが飛び立ち、魔法薬も全て消え去る。

実質、エヴァの魔法は無くなったと言ってもいいだろう。

エヴァは自由落下して建物の屋根に着地する。

ネギもそれに合わせて屋根に着地した。

「風系補助呪文を掛け合わせたか。器用なマネをする」

ちょっと薄着のエヴァから目をそらしながらネギは宣言した。

「これで捕縛すれば僕の勝ちですね。大人しく何でこんなことをしたのか、言ってもらいます」

エヴァはそれを見て、

「……坊や、中々やるようだが……私を舐めるなよ？」

「何をーグッ!?」

突然、ネギは首に腕を回され宙に浮かされる。

これは、目の前のエヴァがやっていることでは無い。

(新手、か!)

「……解放」

「……!」

そのネギの言葉に、首に手を回していた人間は一気に後ろに飛びずさる。

ネギの周りに光球が九つ浮かび、ネギの周囲を駆け巡った後、虚空へと掻き消えた。

「ほう、遅延呪文か。なるほど、意味無き油断では無かったわけだ」

「けほっけほっ……くっ!？」

ネギは咳き込んだ後、飛んでエヴァの隣に立った人を見る。  
見覚えのある人物だった。

「さて、紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番、ミニステル・マギの絡繰茶々丸だ」

「な、ミニステル・マギ!？」

ネギは驚愕する。

まさかエヴァンジェリンに術者がいるとは。  
だが、気づく。

エヴァンジェリンの異名の一つ。

「人形使い（ドールマスター）……!」

「そつだ。まっ、茶々丸はロボでハイテクってやつらしいがな」

マズイ。

ネギの思考をその言葉のみが埋める。

一対二。どっちが有利かはまる分かりだ。

しかも茶々丸は接近戦が出来る。

ネギも接近戦は出来るが、所詮「距離を取るための戦い方」でしかない。

ネギがもつとも得意とするのが中遠距離戦闘なのだ。

今の距離は五メートル。簡単に詰められる距離だ。

「……くっ!」

呻くネギを見てエヴァは言う。

「まあよく坊やは頑張ったよ。だが、私の呪いを解くために血を寄越してもらおうか……！」

エヴァの隣りにいた茶々丸が飛ぶ。

飛んで来た茶々丸の右手は防げたものの、左手は首に回され絞められた。

「グッ……の、呪い……？それが貴方の力を封じている……」

「ああ、そうだよ……」

なんだか体を振るわせながら言い出したエヴァを見て、ネギはデジヤウを感じた。特にアスナ関係で。

「私はお前の父、つまりサウザンドマスターに敗れて以来魔力も極限まで封じられ！もう十五年間もあの教室で日本のノー天気な女子中学性と一緒に勉強させられてるんだよ！」

ガックンガックンネギの胸ぐらを掴んで揺さぶりながらエヴァは理不尽な怒りをぶつける。  
ネギは必須に弁解した。

「い、いや！僕知りませんし！僕に当たれても……」

そんなネギのセリフを無視し、エヴァはネギの首に顔を近付けてゆく。

「このバカげた呪いを解くために、死ぬまで血を吸わせて貰うぞ……」

「なっ！？くっ……」

ネギはもがくが、一向に茶々丸の拘束から抜け出せない。  
エヴァの唇がネギの首に触れ、血を吸い始めた。

「あっ、くう……」

「んっ、んっ」

血を吸われる度に、思考能力がどんどん低下してゆく。  
ネギは朦朧となっていていき、

(こっで、終わりか……)

諦めてしまった。  
だが、

「こらー！うちの居候に何してんのよ！！」

天はネギを見捨てなかった。

突然の乱入者の足に茶々丸とエヴァンジェリンは蹴られ、

「あつ……」

「はぶうう！？」

面白いくらいに吹っ飛んだ。

ズサザアアア！と顔面ヘッドスライディングをしてエヴァは頬を抑

えながら起き上がる。  
そこにいたのは、

「き、貴様は神楽坂明日菜！」

「あつ、あれー？あんた達クラスの……！」

アスナの問いに答えず、エヴァは、

「よ、よくも私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜……………」  
お、覚えておけよ……………」

どっかの三下悪党のセリフみたいなのを涙目で言つて、茶々丸と一緒に屋根から飛び降りた。

アスナは慌てて屋根の淵に立って下を見るが、二人の姿は無い。

「ここ、八階よ……？あつ！ネギ！大丈夫！？」

「す、すみません。アスナさん……」

心配するアスナの声に、ネギは立ち上がりながら返す。  
若干よろよろしているが、ネギは概ね無事だった。ただちよつと貧血気味だが。

(……迷惑、かけちゃったな)

ここに走ってくるアスナを見てネギは思う。

次こそは、と。

戦いは幕を開け、  
少年は自分の誓いを信じ進む。

## 第七話・戦いまでの間

アイツは変なやつだった。

ガキのくせに大人びてて力があつて。

でも頑固で泣き虫でガキっぽくて。

どこか、惹かれていた。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第七話・戦いまでの間

「おはようございます……」

「ちょ、ネギ！？アンタちゃんと寝たの！？」

朝、部屋にネギの元気が無い声が響いた。

アスナはネギの余りにも元気の無い姿に驚き尋ねる。

ネギの目の下にはクマができ、服はよれよれ。どこかの病人のようだ。

「寝ましたよ……一時間」

「ガキは普通もつと寝る！」

ネギのともでも告白にアスナはビックリ仰天。

ハハハッと笑っているネギがとても心配になった。

この後寝てしまったネギをアスナはおぶって登校することになる。

（エヴァンジェリンさんはサボリ、かな？）

アスナの背中では寝ていて、気がついたら教室だったという体験をしたネギは、授業中のクラスを見渡す。

最後尾にいる筈のエヴァは居なかった。茶々丸はいたが。

（はあ、まさかあのエヴァンジェリンと戦うことになるなんて…）

そうネギは口に出さずにため息を吐く。

（吸血鬼用の魔法なんか習得してないしなあ。例え覚えたとしても、

そんな千の雷を超えるかも知れない大魔法が何の準備も無しに出来るはずも無い)

もちろん、対吸血鬼用の魔法というのは存在する。  
だが、大規模なタイプばかりだし、様々な条件が必要な場合もある。  
しかも、

(確実に吸血鬼を 殺す ための魔法だしね……)

そう。殺すための魔法だから手加減などできないのだ。

(エヴァンジェリンさんは敵である前に生徒だし、なんとか話し合  
いで解決できたらいいんだけど……)

「ネギ先生」

(戦いになったらマズイ。パートナーがいるだけでここまで戦いに  
くくなるなんて)

「ネギ先生？」

(まだ奥の手を隠してるかも知れない。相手は歴戦の魔法使い、ど  
う対策を練る……?)

「ネギ！」

「はわっ！？なんですかアスナさん！？」

「なんですか、じゃないわよ。もう英文読み終わってるわよ」

ネギは文句を言うが、アスナが和泉をさしたため頼んでいた英文音読が終わったのだと気がついた。

「す、すみません和泉さん！」

「あはは、気にせんでええよネギ先生」

苦笑している和泉にネギは頭を下げる。

和泉はふと、ネギをジロジロ見て聞いてみた。

「なあ、ネギ先生。あんま寝てないみたいやけど、どれくらい寝たん？」

「えっと、登校中もアスナさんのおかげで寝られたので……一時間半、かな？」

「……………一時間半！？」「……………」

朝のアスナと同じリアクションを取る生徒達。

極一部の生徒を覗いて普通は最低でも六時間は寝る。

「ちょ、ネギ君大丈夫なの!？」

「はははっ、大丈夫ですよ。ちょっと頭がクラクラするだけで」

「それは大丈夫とは言わないわよ!」

ネギの? 気な言葉にアスナが突っ込む。周りもウンウンと頷く。

「どうしたのネギ君? アスナになんかされたの?」

「まあアスナさん! ネギ先生とまさかあんなことやそんなことを…

…!？」

「アンタじゃないんだからそんなことしないわよ!」

「アスナさんは関係ないですよ。ただちょっと新学期早々問題が…

…」

ネギは睨み合いを始めた二人にそう言っ注意を向けさせる。

「あれ? もしかしてパートナー候補の悩み?」

「えっ!?! そうなの!?!」

「ネギ君そつなのー!?!」

「えっ！？いや、違……」

ふと、言いかけて気づく。

相手にパートナーがいるのが問題なら……

（いや、ダメだ！それだけは……）

「違いますよ」

ネギが心で否定し、言い切った瞬間、授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「むう……」

「なーにやってんのよ、ネギ」

「えっと、エヴァンジェリンさんへの対策を考えています」

夜、テーブルの上に紙を広げ何かを書き込みながらネギはアスナに答える。

アスナは対策？と首をかしげながらネギの上から覗き込む。  
紙には複雑な魔法陣が描かれていた。

「何これ？」

「魔法の術式の一つです。まあ、役に立つかは分かりませんが……」  
「……」

ちなみに今このかは居ない。

大浴場にでも行っているのだろいう。

アスナは心配そうに尋ねる。

「アンタ大丈夫なの？」

「だ、大丈夫ですよ……たぶん」

ネギは冷や汗を流しながら言う。

正直に言って真っ正面からぶつかった場合、勝ち目は無いに等しい。ネギは推測の一つとして「エヴァンジェリンは満月の夜じゃないと力を発揮出来ないのでは無いか？」と思っている。

更に女子生徒達の血を吸うことも関係している筈だ。

「時間は恐らくまだあります。今のうちに何か手を……」

「よっ、ネギの兄貴い！」

と、突然ネギに声がかかった。

今部屋にはネギとアスナの二人しか居ないはずなのに、だ。二人は顔を上げ、周囲をキョロキョロする。

「な、なに今の声？」

「……でっさあ」

「あっ」

ネギは声がしたほう……床を向き、そこにいた人物いや、生物に気がついた。

「カモ君！」

「へへっ、兄貴！久しぶりだな！」

それは真っ白なイタチ、ではなくオコジヨだった。  
正し、普通に喋っているが。  
アスナはそれを見て、

「お、オコジヨが喋った……？」

まあ、当然の反応をした。

「へー、五年前にねえ」

「そーなんすよ」

あれから始まったのは力モによるネギとの出会いの話。  
アスナはそれを聞いてほおーと関心していた。  
だが突然、ネギは疑いの表情で力モに尋ねる。

「所で力モ君……？まさかとは思うけど、また下着ドロでもしたんじゃないだろうね……？」

「い、いや！そんな事はしてません！」

「またってことはやったことがあんのね……」

ガクガク震え出した力モの言葉に、アスナはため息をつく。

だが力モはそれ所では無かった。脳裏に浮かぶ光景はただ一つ。  
一年前、下着ドロをした時の……

『なあ？少しお話しようかカモオ？大丈夫だ、百分の九十九殺して済ませてやる』

『ほらほら！死ぬ気で避けねえと本当に死ぬぜえ！？俺をもつと楽しませろお！』

「ガタガタブルブル」

「あ、あれカモ君！？」

「ちょ、なんか凄く震えてるわよ！？」

雷怖い雷怖い。

カモは十分くらいそう呟き続けた。

「で、結局あんたは何しに来たのよ？」

「俺っちはネギの兄貴を助けるために来たんでさあ。兄貴、全然進んでないみたいですしねえ」

「え？何が？」

心当たりが無く、ネギは戸惑う。

カモはチツチツと舌を鳴らしながら、

「パートナーのことっすよパートナー！」

そう、なんか欲望が混じった顔でドーン！と言った。

少年はどうするのか、  
まだそれは少年自身にも分からない。

## 第八話・機械人形との会合

傷つけ合うのは嫌いだ。

だって、傷つけるということは自分の大切な者が傷つく可能性がある  
るってことだから。

だったら、誰も近付けなければいい。

そうすれば――

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第八話・機械人形との会合

カモが来てから二日後、朝起きたネギが見たのはアスナに追いかけて回されるカモの姿だった。

眼をすりながらネギは寝ぼけた状態で近くにいたこのかに挨拶。

「おはようございます……」

「おはような、ネギ君。朝スクランブルエッグと目玉焼きどっちがええ？」

「じゃあスクランブルエッグをお願いします……」

「はいな」

（ギャー！？ 姐さんギブギブ！ 内臓が！ 内臓が飛びでグエッ！？）

カモがアスナに握りつぶされかけているのをスルーしながら、ネギはパジャマを脱いで着替え始めた。

カモはネギの使い魔扱いになった。

使い魔として自分なりにネギの役に立とうとするこのオコジヨ精霊は、意外と人の感情に鋭い。

そして、ネギの態度から不安を感じたのも彼の長所なのだろう。

「どーした兄貴？」

「うん、ちょっとね……」

ネギは周囲を見ながら返すが、感じたことがある気配を背中に感じ、振り返る。

「やあ、久しぶりだなネギ先生？」

「……」

そこに居たのは言わずとも知れた2人組、エヴァンジェリンに茶々丸だった。

「今日もサボらせてもらっよ。先生が担任になってから色々と楽になった」

「くっ……！」

近くに居て会話に入れないアスナを横目に見つつ、ネギは魔力を集めるが、

「勝ち目はあるのか？学校内では争わない方がお互いのためだと思うが」

「ぐっ……」

「ああ、言うておくがタカミチやジジイ（学園長）に助けを求めようなどとは考えるなよ？また生徒達を襲われたくなければな」

簡単に見破られ、ネギは思念詠唱を中断する。

エヴァンジェリンは不適に笑いながら身をひるがえし去って行った。茶々丸もペコリと一礼し、後について行く。

「……ふう」

その背中が見えなくなった所で、ネギは安堵の息を吐く。神経がガシガシ削られて行く感覚は気持ちのいいものではない。

「ちょ、ネギ？」

「大丈夫ですよアスナさん。ちょっと疲れただけで」

「なんなんすかアイツは！？タダもんじゃないみたいだしよお」

アスナがネギの力の抜けた体を支え、カモはネギに説明を求めた。

～説明中～

「く、国へ帰らせましていただきます」

「待てコラ」

どこから取り出したのか帽子とカバンを持って何処かに行こうとしたカモをガシツと、尻尾を掴んで止めるアスナ。

「しつつかし、ネギの兄貴よく生き残ったな。真祖の吸血鬼っていやあ最強クラスの化けもんじゃねえか」

「っていうか、そんなにスゴイの？」

ネタだったのかネギにすぐ話しかけるカモに、アスナが尋ねる。

「そうっすねー……ゲームに例えると最初の敵がいきなりラスボスクラス、みたいな」

「うわー……勝てるの？」

カモの例えでネギの危機的状況を完璧に理解出来たアスナは、ネギに問いかけた。ネギはむずかしい顔をしながらも頷く。

「はい。可能性は低いですがゼロじゃないです。呪いのせいでエヴァンジェリンさんは弱ってますし、茶々丸さんさえ何とかすれば……」

「ふふふっ、それならいい作戦があるぜ！」

カモが何やら飛び上がりながら叫ぶ。

そのカモを怪しいと思いつつ、二人は続きを待つ。

カモの提案は、

「ネギの兄貴が仮契約して茶々丸ってやつを二対一でボコれば」  
「却下」

言い切る前に、ネギに却下された。

理由は二人は敵の前に自分の生徒だから。

「茶々丸さん」

「……ネギ先生」

廃墟でネコに餌をやっていた茶々丸は、その言葉に振り向いた。そこに居たのは肩にオコジヨを乗せたネギに、隣にネギの杖を持って立つアスナだった。

「少し、お話がしたいんですがいいですか？」

「……構いません」

茶々丸はそう言って、ふと疑問に思った。

（なんでお二方の眼に泣いた後があるのでしょうか？）

茶々丸は知らなかった。

自分のドラマのような行動を見ていたネギとアスナが感動して泣いてたなど。

どこにでもあるような喫茶店。

そのボックス席に三人と一匹はいた。

ネギとアスナは同じソファーに腰掛け、机の上にはカモ、向かいのソファーには茶々丸が座っていた。

沈黙を破るように、ネギは尋ね始める。

「えっと、エヴァンジェリンさんが僕を狙うこと何ですが、やっぱり呪いを解くことが目的なんですね？」

「はい。正確には登校地獄の呪いです」

「えーと何？その呪い？」

「昔不登校の生徒に痺れを切らした教師が編み出した呪いで、効力は「必ず学校に登校しなければなくなる」、です」

「……えっ？そんなしょぼそうなの？」

茶々丸の言葉に、ラスボスクラスのやつにかかっている呪いとか凄いらんだろうなー、と思っていたアスナはテンションが下がった。

「でも、そんな呪いなら自力で解けるのでは……？」

ネギが疑問に思う。

対したことのないような呪いを、どうしてエヴァンジェリン程の術者が解けないのか？

「それはサウザントマスターの膨大な魔力によって、しかも出鱈目にかけられたためのようです」

「……つまり？」

「呪いが変質してしまい、マスターでも解けないような呪いになってしまった、ということです」

「……ダメ、意味わかんない」

「姐さん、これくらい分かってうぜ」

難しいのは苦手なのよー、とアスナはテーブルに突っ伏す。それにつつこむ力モ。

が、ネギはちゃんと分かっていた。

「……そのために僕の血が必要、ですか……」

「はい。……一つお聞きしてもいいでしょうか？」

茶々丸から尋ねられるなど思っていなかったため、一瞬ネギは惚けるが、笑顔で頷いた。

茶々丸は尋ねた。

「神楽坂アスナさんはネギ先生のパートナーなのではないか？」

「違いますっ！！！！！！」

ダンッ！！とネギは手を机に叩きつけ、立ち上がる。

他の人の視線など気にせず、焦った表情でネギは茶々丸を睨む。  
そこに先程までの笑顔はカケラも残っていない。

アスナはいきなり怒鳴ったネギについていけず、カモは苦虫を噛み潰したような苦い顔をしていた。

「……すみません。でも、アスナさんは魔法を知ってるだけの一般の人です」

ネギは落ち着いたのか、席に座り茶々丸にハッキリと告げる。  
アスナは不思議に思った。

ネギはこんなにハッキリ物を言う人間だったか？と。

「そう、ですか」

茶々丸は、

「ネギ先生は優しいんですね」

そう、最後に言った。

次の日、朝起きたら部屋にはアスナー一人だった。

いや正確にはもう一匹。

「おはようっす姐さん」

「うーん……あれ？このかとネギは？」

アスナは朝起きて、部屋にはカモと自分だけだと気がつく。

「このか姉さんは買い物に行ったポイぜ。ネギの兄貴は山だ」

「山あ？」

アスナは意味が分からず言い返す。  
カモは補足説明を始めた。

「対エヴァンジェリン用に少し鍛えるそうだぜ。魔法使っから山でやるみてえだ。明日には帰るってよ」

「ふーん」

パパッと着替え終わったアスナは納得した。  
ネギが居ない。カモだけ。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「おれっちに答えられることならいいぜ」

「じゃあさ、昨日から疑問に思ってたことなんだけど……」

「アイツ、なんで私をこの事に関わらせたくないって思ってるの？」

「ふう……」

ネギは息を吐き、木によりかかる。  
さすがに魔力を使いすぎたかも知れない。

「でも、まだまだだな……」

ネギは足りないと言う。  
まだ、自分の望む力を手に入れられてないと。  
彼が求めるのは――

ガサガサ！

「へっ！？く、クマ！？」

草を掻き分けて近付いてくる音に、慌ててネギは立ち上がる。

だんだん足音が近付いてきて……

「おや？ネギ坊主でござらんか」

「……はっ？」

突然出て来た自分のクラスの生徒に、拍子抜けた声を出した。

それからネギが帰ったのは夜の九時だった。

「ただいまですー」

「お帰りってアンタなんか服ボロボロよ？」

「ちょっと色々あつて．．．．．でもおかげで学びました」

「はあ？」

ネギは笑う。

アスナは心配するばかり。

決戦は、着実に近付いていた。

？

いよいよ戦いが始まる。

勝利の女神はどちらに微笑むのか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1651m/>

---

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

2010年10月10日15時15分発行